【恵心僧都像】
［南北朝時代，
滋賀・聖衆来迎寺］

第６祖
源信和尚の生涯と教え

令和５年11月19日（日）
第35回 信行寺仏教講座

源信和尚が生きた時代

源信和尚（942－1017）は平安中期の僧侶で、藤原氏が摂関政治によって政治実権を独占した時代。「この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」の詩で有名な藤原道長（966－1028）は、晩年『往生要集』を熟読し、阿弥陀如来の浄土往生を願った。

また、道長の娘・彰子の家庭教師であった紫式部にも浄土信仰がみられる。『源氏物語』に登場する「横川の僧都」のモデルは源信和尚といわれている。

源信和尚（942－1017）

■生涯

９４２年、大和国（現・奈良県）の当麻郷に生まれる。幼くして比叡山に上り、横川の慈慧大師良源に師事し、天台の教えを学び、早くから才能を見せた。比叡山の貴族化に批判的であった源信は横川に隠棲し、学問と念仏の実践に没頭する。

６３歳のとき、権少僧都（国から与えられる僧の階位の一つ）に任命されるが翌年にその職を辞退する。７６歳で示寂。恵心院に住したことから恵心僧都ともよばれる。なお『往生要集』では、穢土のなか、とくに地獄界について壮絶な描写がなされていることでも有名であり、これ以降の仏教美術に大きな影響を与えたことでも知られている。

【地獄絵図】
［鎌倉時代，滋賀・聖衆来迎寺］

【国宝 阿弥陀二十五菩薩来迎図】

［鎌倉時代（14世紀），京都・知恩院］

阿弥陀堂

阿弥陀仏を本尊とする仏堂の総称である。平安中期から後期にかけて浄土信仰が流行したのにあわせて，多数建立された。

【平等院鳳凰堂】

日本仏教の二大スター

プロ野球でいえば王・長嶋か

源信和尚は･･･

イチロー？

主著『往生要集』を遣宋したところ、天台山国清寺では往生極楽の因縁を慶び「南無日本教主源信大師」と恭敬礼拝したと伝えられる。

■著作

主著『往生要集』は天台の教えに立脚し、特に「念仏」の教えに焦点を絞って、極楽往生の思想や実践を体系化した書物である。本書は往生浄土の思想が体系化されており、法然聖人や親鸞聖人など後世の浄土教者に多大な影響を与えた。その他の著作には、『一乗要決』『阿弥陀経略記』などがある。

『往生要集』の概略

跋文に、「永観二年冬十一月、天台山延暦寺首楞厳院でこの文を撰び集め、明くる年の夏四月に、その功を終えた（取意）」とある。

⇒　永観2年（984）11月から寛和元年（985）4月、源信和尚43歳から44歳にかけての、わずか半年の間に著わされた。

花山信勝博士の研究（原本校注・漢和対照『往生要集』）によると経典の引用部数は、典籍名を明示したものだけで160数部。直接引文は654文。間接引用を合わせると952文。

『往生要集』撰述の背景

空也上人（903－972）は「南無阿弥陀仏」と口で称える称名念仏（口称念仏）を日本において記録上初めて実践した人物とされ、日本における浄土教信仰の先駆者と評価される。摂関家から一般大衆に至るまで幅広い層・ことに出家僧に向けてではなく世俗の者に念仏信仰を弘めたことも特徴である。

この空也上人の影響によって結成されたのが「勧学会」である。

勧学会は平安時代中期・後期に文人と比叡山の僧侶が、3月15日あるいは9月15日に比叡山あるいは平安京内外の寺院に集まって『法華経』をテーマとして講義・念仏・作詩を行った法会。慶滋保胤を中心に康保元年（964）に結成された。

しかし、「風月詩酒の楽遊」という評価もあり、娯楽的な性格も加味されていたことが知られる。寛和2年（986）に慶滋保胤が出家することで解散。

寛和２年（986）に25人の僧侶による念仏結社、「二十五三昧会」が結成。この結社の性格は、極楽往生を希求する念仏結社であり、月の15日ごとに僧衆25名が集結して念仏を誦し、極楽往生を願った。

『往生要集』の成立は寛和元年（985）で、源信は二十五三昧会のメンバー。本書成立の背景には、往生極楽のための行法・行儀をまとめておく必要性があったと考えられる。

慶滋保胤

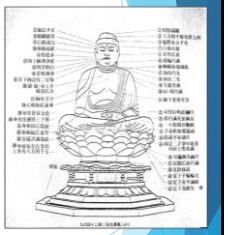
慶滋保胤『二十五三昧起請』

1，毎月十五日に念仏三昧を修すること。
2，光明真言を誦して、土砂加持を修すること。
3，結衆は規律を厳守し、叛いた者は脱退させて、代わりの者を補充する。
4，別所に阿弥陀如来を奉安した往生院を建立し、病んだ結衆はそこに移す。
5，病んだ結衆を往生院に移した時は、二人一組となって昼夜の別なく従い、一人が看病、一人が念仏を担当する。
6，花台廟と名づけた結衆の墓地を定め、春秋2回、集まって念仏会を修する。
7，ひたすら西方極楽浄土を念じ、極楽往生を念ずる。
8，結衆に欠員が出ても、残った結衆が修善によって、先に往生した結衆との縁を保たなければならない。

■大文第四「正修念仏」が中心

『往生要集』当面では、阿弥陀仏の姿を心に思い描く観想念仏が中心。称名念仏も説かれるが、あくまで中心は精神集中する観想念仏。

⇒ 天台僧という立場から見た源信和尚



天台宗の観想念仏を主に説く『往生要集』が、なぜ浄土真宗の聖教になっているのか？

■法然聖人の『往生要集』の見方

法然聖人は善導大師の『観経疏』「散善義」の文によって回心し、阿弥陀仏の本願に選び取られた称名念仏一行こそが衆生往生の業因であるとした。そこで聖人は、善導大師の思想を通して『往生要集』を見直された。

『往生要集料簡』（聖典全書6・102）
私に云く。恵心、理を尽くして往生の得否定るには、善導和尚の専修雑行の文を以て指南と為したまふ也。また処々に多く彼の師の釈を引用す。見るべき云々。しかればすなはち、恵心用んの輩は、必ず善導に帰すべき哉。

法然聖人が著した『往生要集』の注釈書

『往生要集詮要』・『往生要集料簡』
『往生要集略料簡』・『往生要集釈』

法然房源空

梯 信暁師（『現代と親鸞』第45号・2021年）

親鸞がなぜ法然を師匠としようと考えたのか。それは恐らく法然が当時、『往生要集』研究の第一人者だったからだと思います。法然が黒谷の叡空上人を訪ねたのも、やはり叡空が当時、『往生要集』研究の第一人者だったからだと思うのです。つまり、叡空・法然・親鸞は『往生要集』という書物で結ばれているというふうに私は思っています。

大阪大谷大学教授
梯 信暁

①大文第四「正修念仏」，雑略観の三想一心の称念

もし相好を観念するに堪へざることあらば、あるいは帰命の想により、あるいは引摂の想により、あるいは往生の想によりて、一心に称念すべし。

②大文第八「念仏証拠」

もろもろの聖教のなかに、多く念仏をもつて往生の業となせり。その文、はなはだ多し。略して十の文を出さん。…（中略）…二には、『双巻経』（大経・下）の三輩の業、浅深ありといへども、しかも通じてみな「一向にもつぱら無量寿仏を念じたてまつれ」とのたまへり。三には、四十八願のなかに、念仏門において別に一の願を発してのたまはく、「乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取らじ」（第十八願）と。四には、『観経』（意）に、「極重の悪人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極楽に生ずることを得」と。

③大文第十「問答料簡」，善導大師の三心具足の専修念仏

導和尚（善導）のいはく（礼讃）、「もしよく上のごとく念々相続して命を畢ふるを期となすものは、十はすなはち十生ず、百はすなはち百生ず。もし専を捨てて雑業を修せんと欲するものは、百にして時に希に一二を得。千にして時に希に三五を得」と。

法然聖人は『往生要集』の真意は、第十八願の他力念仏であると見抜いた。親鸞聖人は法然聖人の『往生要集』観を承ける。

⇒　七高僧という立場から見た源信和尚

『往生要集』序文（七祖篇797）

それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、たれか帰せざるものあらん。ただし顕密の教法、その文、一にあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人は、いまだ難しとなさず。予が如き頑魯の者、豈敢てせんや。このゆゑに、念仏の一門によりて、いささか経論の要文を集む。これを披きこれを修するに、覚りやすく行じやすし。

『往生要集料簡』（真聖全6・95）

それ、序はあらかじめ略して一部の奥旨を述して以て部内の元意を示すものなり。しかるに序の中にすでに「念仏の一門に依る」と云う。明らかに知んぬ、この『集』の意、諸行を以て往生の要とせず、念仏を以て要となすということをなり。

序文で示される３つの立場

①時代の認識

「往生極楽の教行」が「濁世末代の目足」であることを述べて、源信和尚の生きる時代が「末法」であるという時代認識。

②機根の能力

「予が如き頑魯の者、豈敢てせんや」とあるように、仏道を歩む能力（機根）の面から自己内省して愚者と位置づけている。

③教行の難易

「これを披きこれを修するに、覚り易く行じ易し」と言われ、末法の時代に愚者にとって最も相応しい道として念仏の一門を選択している。

親鸞聖人の相承

「正信念仏偈」

源信広開一代教	源信広く一代の教を開きて
偏帰安養勧一切	ひとへに安養に帰して一切を勧む。
専雑執心判浅深	専雑の執心、浅深を判じて、
報化二土正弁立	報化二土まさしく弁立せり。
極重悪人唯称仏	極重の悪人はただ仏を称すべし。
我亦在彼摂取中	われまたかの摂取のなかにあれども、
煩悩障眼雖不見	煩悩、眼を障へて見たてまつらずといへども、
大悲無倦常照我	大悲、倦きことなくして常に我を照らしたまふといへり。